

「民主主義 VS 権威主義」は「非西洋」を敵視する図式

哲学者、西谷修さん

(東京新聞 6月22日付に掲載)

「民主主義」対「権威主義」は、民主主義を自称する側が「敵」を名指すための図式です。西洋が普遍化した世界秩序を維持するための新卒のイデオロギーです。秩序に服する国々が民主主義、従わない国々は権威主義と規定され非難され、その国の人びとを解放するという話になります。イラク戦争時の「ならず者国家」と同じですね。

今、権威主義といわれるのは第一に中国、そしてロシア、イスラム世界のイラン、米国に服さないキューバなど中南米の国々も入ります。私はこれらの国で起きている人権侵害を善しとするものではありません。しかし、それをもって民主主義の自分たちは正しく、それに従わない国々や政権は許さないという独善に世界を巻き込もうとするのはどうなのか。米国の姿勢はすでに戦争前夜のようなものです。

根本にあるのは歴史の没却です。近代百年の中国はどうだったか。西洋列強と日本に食い物にされてきた。香港はその象徴です。中国の自立の戦いが起こり、辛亥革命と対日戦争を経て最終的に共産党が国をまとめた。ようやく戦後世界でオートノミー（自治）を確保しました。そんな歴史を無視して、西洋の言うことを聞かないからたたくというのは懲りない独善です。

民主主義とは何でしょうか。地域に生きる人々のオートノミーが保障されることだと私は考えます。それは西洋の専売特許ではない。日本の一揆もそうでしょう。しかし、西洋は民主主義を個人の自由に基づく近代の社会システムと結びつけて概念化しました。

この自由は、ジョン・ロックによれば私的で排他的な所有に基づいています。欲望は解放され、世界の端にまで所有を広げていきました。飽和状態になった中で起きたのが二つの世界大戦。その反省から戦後は協調が唱えられたのですが、障害になったのがイスラム世界であり、今や中国です。西洋には、アジアは遅れた段階にあるという考えが今も残っています。アジアの人間には個人の自由が分からない。つまり、権威主義であり近代社会の趨勢（すうせい）になじまないというわけです。

西洋世界は自分たちが普遍的基準だとの思い込みから抜けられず、いまだに非西洋を追い詰めようとしています。権威主義という用語が今またその道具の一つになっているようです。

（聞き手・大森雅弥）

<にしたに・おさむ> 1950年、愛知県生まれ。近著に『私たちはどんな世界を生きているか』（講談社現代新書）、『“ニューノーマルな世界”の哲学講義』（アルタープレス）。

（東京新聞 6月22日付）